



メイド・イン・モリoka
made in morioka

「中村さんは！」
「中村さん」
ホームスパン
「中村工房」の
ひみつ
photo/momoko numata

羊毛を染め、手紡ぎ・手織りで作るホームスパン。「ざっくりした風合いの毛織物」のイメージが強いが、盛岡市高松にある中村工場の製品はちょっと違っていった。機械紡ぎのなめらかな手触りの糸やシルクリボンを使ったマフラー、東京の作家とコラボレーションした帽子やバッグ……。[今]のファッションにぴったりの、斬新な配色やデザインの製品も少なくない。そんなトレンド感たっぷりのホームスパンが盛岡市内の静かな住宅街で作られている「秘密」を探るべく、工房を訪れた。

「家（ホーム）にて（紡ぐ）（スパン）」という意味の毛織物「ホームスパン」は、英国・スコットランド生まれ。保温性が抜群のうえに驚くほど軽いのが魅力で、「最高級の服地」と評する人もいるほどだ。日本では、日露戦争で防寒対策の必要性を感じた当時の農商務省が英国から綿羊を導入し、「羊の飼育に適した気候だから」と北海道、長野、岩手で飼育を奨励、同時にホームスパンの技術を移入したのがはじまり。その後、後継者不足などから北海道や長野では廃れてしまったが、岩手では現在も数カ所が伝統の技を守り伝えている。

中村工房はその希少な工房のひとつ。主人で染色担当の中村博行さんは三代目だという。

中村さんの祖母・ヨシさんが織物を始めたのは大正8年。工業試験場で染めてもらった羊毛を手紡ぎ・手織りし、主に服地やコート地、シヨールなどを作るほか、袖や裂き織物も作っていた。「造り酒屋のお嬢様だったせいとか、おしゃれて芸能好き。僕が子どもの頃は、伊達メガネをかけていたんですよ。東京にも夜行列車に18時間揺られてちよくちよく行っていたらしく、帰宅後すぐに機を織っていたと聞いてい

ます。東京でインスピレーションを得てきたんでしょうかねえ。

やがて養女のトシさんとその御婚さんである行雄さん、つまり中村さんのご両親が工房のスタッフとして加わると、行雄さんを中心に自分たちで染色も行うようになった。

「最初は化学染料だったんだけど、ある時ヨシさんの友だちで彫刻家の吉川保正さんが草木染めを勧めてくれたので、東和町でホームスパンに取り組んでいた及川全三さんのところに勉強しに行っただけです。以来親父の染色は天然染料中心になったんだよね。」

しかし色合いは変わっても、製品の主流は相変わらず服地やコート地。行雄さんが2代目を継いだ時、これにシルクリボンを使ったシヨールが加わった程度だった。

それが現在のような商品構成になったのは、1972年、世界的な服飾デザイナーで先月高松宮殿下記念世界文化賞を受賞した三宅一生氏との出会いがきっかけだ。何かの雑誌でうちの製品を見てくれて、マフラーやストールづくりを頼まれたんです。最初は染色担当でもある行雄さんが窓口となっていたが、やがて、大学



「織り」を担当する5人の女性のうち1人は自宅で作業しているので、工房では4人の女性が機を織っている。全員が、「織り」だけではなく「整経」「綜統通し」とひと通りの作業ができる仕組みにしているのだとか



人の手と機と糸が一体化したと思わせるほど、その動きはなめらかで美しい

